

## 前 言

本號のタイトルは前號に引き續き「出土文獻と秦楚文化」(Ⅱ)である。前號出版直前の2018年3月、谷中信一氏(日本女子大學名譽教授)を代表とする科研研究グループが日本女子大學目白キャンパスで國際學術シンポジウムを開催した。前號の前言でも述べたように、本號の執筆者も私を含めてその研究グループに関わりのある研究者である。その席上、參加者の間に波紋を広げたのは、プリンストン大學東アジア學部のマーティン・カーン氏の報告で触れられた、盜掘された簡牘を利用することについての倫理的な問題である。詳しくは本號所収の同氏の論文をお読みいただきたいが、例え研究目的とはいえ、盜掘品を購入したり研究に利用したりすることは、盜掘犯と共犯關係になるとされる。この研究グループの活動以外でも、2017年12月に勤務先がプリンストン大學東アジア學部を訪問するのに私が同行し報告を行った際、カーン氏からこの倫理問題について質問をお受けした。恥ずかしながら、その場では曖昧な答えしかできなかつたと記憶する。その後上記シンポジウムを迎え、再びその課題、というよりは宿題に向き合わねばならないこととなった。

これまで中國で盜掘されて骨董市場から買い戻された資料(その中の簡牘について我々の研究グループでは、正式な考古發掘を經ていないという意味を込めて「非發掘簡」と呼んでいる)については、その眞偽が常に問題とされてきたものの、この種の倫理問題が公に振り返られることはなかつたと認識している。ただ、研究機關がこれら資料を決して安價とはいえない金額で買い戻すことにより、骨董市場におけるそれらの更なる騰貴を招き、結果的

に盗掘者の活動を盛んならしめる現状については、少なからぬ人々が話題にしていたことは確かである。このことは例えば毛公鼎発見の経緯に見られるように、簡牘のみならず甲骨・青銅器・石刻など、出土資料全般についてあてはまることであり、中国とその周辺においては、この種の資料は前近代からそういうものであったともいえる。この課題を解決するには倫理的な事柄を扱う分野の助けも必要とすることであろうし、俄仕立ての対応でどうなるものでもない。現時点では少なくともこの問題が存在することを念頭に置くことは求められるであろう。

本號の執筆者と論考タイトルは次の通りである。(敬稱略)

Martin Kern (マーティン・カーン) (新津健一郎譯) 『『詩經』「蟋蟀」とその意義——古代中國の詩とテキスト研究の諸問題』: 傳世文獻の『詩經』蟋蟀篇と出土文獻である清華簡報告書第一冊の『耆夜』を比較対照することを分析の主軸として、中國古代帝國成立以前の文獻の多様性は、それが唯一の原本に遡り得ることを示すものではなく、「レパートリー」と稱すべき、いわば一種のデータベースをもとに構成されたそれら文獻のヴァリエーション相互の重層性によることを、盗掘された簡牘の利用に関する倫理問題にも触れつつ論ずる。

范常喜『《上博九・卜書》中三個兆象名考釋』: 上博楚簡報告書第九冊の『卜書』に記された「豸(旃)」「末」「开(旻/旃)」三つの兆象名は、望山楚簡の遺冊簡に書かれた「白市(旃)」「彤开(旻/旃)」「黃末」三種類の旌旗の名によって釋すべきであり、卜兆の形と「旃」「末」「开(旻/旃)」などの旌旗の形とは近く、卜人はそれによって兆象の名をいったことを論ずる。

なおマーティン・カーン氏と范常喜氏の論考は、上記シンポジウム用の報告(カーン氏は英文)に加筆修正がなされたものであり、他と區別する意味もあって本號では冒頭に置いた。

石原遼平『秦漢時代の「徭」』: 秦漢時代の勞役徵發について、睡虎地秦簡・嶽麓秦簡といった出土法律・行政文書類に見える「徭」字の用例などをもとに論ずる。「徭」の運用範囲は常駐する人員でまかないきれない臨時の労働力需要であり、義務日数は年間24日で過不足があれば繰り越される。徵發は、縣が算をもとに各郷に人数のみ割り當て、郷畜夫と里典が算や戸を基準に人

選を行っていた。これらはすべて更卒の役とは大きく異なるものであり、「徭」と「更」は根本的に性質の異なる制度であった。そして、在地社会と結合した下級官吏の存在が國家の在地社会支配に一定の影響をもったと論ずる。

Yegor Grebnev (葛覺智)「從文體的角度的再論“太公”文獻系統與《逸周書》之間的關係」：これは文體を分析することによって『逸周書』と「太公」(齊太公)の關係を探るものである。『逸周書』は曹魏または西晉期に出土した汲冢書や清華簡諸篇の一部との關連が議論される文獻である。西周初期の王が傳える教訓である「王訓」ともいふべきスタイルが、『逸周書』に最もよく見られる文體の一つである。『逸周書』以外では、「太公」系の文獻と考えられる『六韜』も、『逸周書』「王訓」關連諸篇と同じ構造等を有する。このことは『逸周書』『六韜』はもともと同様の文學的手法・社會的機能をもっていたことを意味するとする。

丹羽崇史「銘文からみた春秋戰國時代華中地域における青銅器生産——「作器者」銘の分析を中心に——」：春秋戰國時代の長江中流域を中心とする青銅器銘文を分析することにより、青銅器の生産・流通の実態を解明しようとする。各時代に共通して作器者の主體として見られるのは「公」「侯」「伯」「子」「叔」「季」「君」といった稱號を有する貴族階層であることを指摘する。青銅器の主な需要者層を春秋中期の社會變動の主體となった「新興の士階層」とする有力説があるが、そうした階層は作器者中に見られないとし、むしろ戰國期にこそ彼らの青銅器受容が高まると結論づける。

小寺敦「清華簡『鄭武夫人規孺子』譯注」：これは清華簡報告書第六冊の一篇『鄭武夫人規孺子』の譯注である。その前半では、春秋時代初期、鄭の第二代君主である武公の死後にその夫人が子の第三代君主、莊公（ここでは「孺子」と記される）に訓戒を與える。後半では、重臣の邊父が大夫達に訓示し、これに大夫達が答え、また莊公もそれに返答しつつ鄭の君主としての抱負を語る。これは前號に掲載される予定であったが、紙幅の都合により本號となった。そのため、この一年間に公表された研究成果が追記されている。

范氏とグレーブネフ氏の論考は中國語で書かれているが、このように研究報告が複数の言語からなることも、我々の研究グループでは通常のことである。またカーン氏は中國文學、范氏は中國語學、グレーブネフ氏は中國思想

史學、丹羽氏は考古學、石原氏と小寺は歴史學が専門である。今回も専門分野が分散しているが、大方は傳世文獻も對照させつつ楚地域の出土資料を中心として扱い、先秦秦漢期の個別テーマに取り組むものである。我々の研究は、關係者各自がそれぞれの研究目的を果たしつつ、相互に何らかの融合が起きることを意圖している。シンポジウム論文を例にすれば、カーン氏の議論は文獻の成立に関わる議論として、范氏のそれは文獻解讀の基盤である文字學として、いずれも全ての領域に関わる。本號が前號とあわせてわずかなりとも先秦秦漢時代の諸相を明らかにすることができたとすれば、それに勝る喜びはない。

谷中信一氏を代表者とする科研プロジェクト「Multi-Disciplinary Approachによる新出土資料の総合的研究」は昨年度で終了したが、研究會活動は繼續している。まさに出土資料の洪水の如き現況下でどう舵取りすべきか、我々は目下検討しているところである。中華圏の研究者との連携を維持・發展させつつ歐米研究者とのそのの開拓、研究對象年代の秦漢期への擴張、といったあたりが軸になるのではないかと考えており、本號所收論考はその試みの一つである。讀者諸賢の御叱正を賜れば幸いである。

2019年3月

小 寺 敦